富山市総合計画審議会「第2回調整部会」 議事録

日時 令和８年 10 月 14 日（水）15:30～17:00

場所 富山市役所８階大会議室

出席者：(順不同)

石動	瑞代	富山短期大学幼児教育学科	教授
庵	栄伸	富山商工会議所	会頭(部会長)
北岡	勝	富山市自治振興連絡協議会	会長
久保田	善明	富山大学都市デザイン学部	教授
中村	真由美	富山大学経済学部	教授
森口	毅彦	富山大学経済学部	学部長

企画管理部　　鎌田部長、中田次長、中山次長、堀企画調整課長、
西野主幹、中田課長代理、八木主査、高瀬主査

議事内容：

1. 開会

2. 部会長挨拶

3. 議　事

(1)第３次富山市総合計画　基本構想(案)及び前期基本計画(案)に対する答申(案)について

4. 閉会

【意見交換】

＜概要＞

- **（1）第３次富山市総合計画　基本構想（案）及び前期基本計画（案）に対する答申（案）について**

委員　　答申案の個別事項について、前回の審議会で人材暮らし部会から細かい意見が多く出たが、1つ1つ丁寧に検討いただき、改善いただいていると思う。また、健康・福祉・医療を最初に配置した点は、市民に身近なテーマであり、順番も適切と考える。

健康・福祉・医療分野に関して、資料1の8ページ No.11 の記載に「相談者」と記載されている部分に関して、困っている市民の対応については答申案にも文章で表現されていると思う。部会の中では、支援が必要であっても相談に来られない人、相談を拒む人、支援機関との関係を築けない人に対するアウトリーチの必要性も議論した。今の記載だと対象が相談者に限定されているため、「必要な支援につなぐ」との記載で趣旨が含まれているのであればよいが、相談を前提とする支援と受け取られないよう、「支援を必要とする人」などの表現を検討してはどうか。

教育について、資料1の7ページ No.4の記載では「すべての子供が学校へ行きたいと思える教育環境」との表現は、登校を前提としているように受け取られる可能性がある。「自ら学びたいと思える」「自分らしく安心して学べる教育環境」など、より幅広く捉えられる表現としてはどうか。

事務局　　短い答申の中では表現しきれない内容もあるが、ご意見の趣旨を踏まえ、誤解を生じない表現を検討したい。

委員　　答申（案）4ページの「9　防災・防犯」は、防災に関する記載のみで、防犯への言及がない。項目としては防犯も含まれているため、一言でも防犯についても触れたほうがよいのではないか。総合計画本体では防犯カメラの設置等が指標に含まれているため、市民が安心して暮らせる社会の実現に向けた防犯対策についても記載する必要があると考える。

また、分野横断重点テーマ以外の個別施策にも、複数分野の連携が必要なものが多い。例えば、商店街のアーケードを大切にしていきたいと委員から意見があり、本件は都市・環境の内容でもある一方で、産業・雇用とも関わる内容である。また、若者が一度市外へ出ても戻りたいと思えるまちづくりは都市・環境の他にも、人材・暮らしにも関係する内容である。

答申案２ページの「3　分野横断及び多様な主体との連携による施策の推進」に、重点テーマ以外についても、必要に応じて分野を横断し柔軟に取り組む旨を加えてはどうか。

事務局　　防犯に関する記載が不足している点を踏まえ、追記を検討する。また、複

数分野にまたがる施策についても、答申の中での言及を検討したい。

委員　　答申案は各分野の意見がよく整理されており、基本的にはこの案で適切と考える。その上で、付け加えるとするならば、「10 産業・雇用」について、本計画期間が 10 年後を見据えているため、若者が魅力を感じる産業を育成する視点が必要だと感じている。計画案では若者にとって魅力的な企業誘致の推進に関して記載があり、配慮されているように思うが、企業誘致だけでは持続的な産業形成につながりにくい。富山の強みであるものづくり産業を基盤としつつ、産業の幅を広げ、持続可能な産業構造を育てる旨を盛り込んではどうか。

「11 観光・交流」については、情報発信に関する記載を加える必要があると考える。富山市民が自分たちのまちの良さを知らないなどの意見が部会で多く出ていた。情報発信により市民自身が地域の魅力を知ることにもつながり、市民が観光客に自分たちのまちの魅力を発信することで、来訪者の満足度や再訪意向の向上にもつながる。市内外に対する情報発信は非常に重要だと思う。

また、先ほど分野横断的な連携の話があったが、部会の中でも同様に連携が重要だと意見が出ていた。答申案が個別分野に関する記載にとどまっているため、個別分野の後に、分野横断重点テーマにも着実に取り組む旨を記載してはどうか。分量等の制約もあるため、可能な形で検討いただきたい。

事務局　　いただいた意見は答申案への反映を検討する。分野横断重点テーマの記載については、総合計画本体と同じ構成にすることは想定していなかったため、その点も踏まえて対応を検討したい。

委員　　答申案については、各部会の細かな意見まで丁寧に反映されていると考える。協働・連携部会で出た意見で心に残っているのは、議事の 17 ページの8番目に記載の「若い世代だけではなく高齢者も幸せになっていると若者が来てくれるのではないか」といった意見や、「幸せなまちを作り、住んでいる人が幸せだと感じると、移住者や定住者が増えるのではないか」という意見である。必ず反映すべきという意図ではないが、コメントさせていただく。

全体に関して、農林水産、防災、持続可能性、都市交通、環境、シビックプライド等の複数分野に関わる「地下水の涵養」を盛り込んではどうか。熊本県で成功している内容であり、上流域の水田に水を張ることで地下水位の回復が期待できる。地下水位の低下は、地盤沈下や浸水リスクの上昇につながり、消雪設備や井戸水の利用、災害時の水確保に影響する。先ほどの企業誘致に関連するが、熊本が企業誘致に成功した理由の1つが豊富な地下水であり、これが半導体企業の誘致につながっている。水の豊かさは富山のシビックプ

ライドにも関わり、複数の領域に関わる内容であるため、分野横断的に小さなプロジェクトでも実施できればと思っている。

事務局　　水源涵養については、農林水産分野において、地域が実施する農地等の保全活動への支援に関する記載がある。ご指摘の内容は重要な課題として担当課と共有し、どこまで盛り込めるか検討したい。

委員　　答申案は、市民の希望を膨らませる富山市の実現につながる内容であり、評価している。計画をどのように市民へ伝え、実現につなげるかが大きな課題であるが、この計画が実現することで「幸せ日本一のまち・とやま」が実現されると思うので、ぜひ工夫をしていただきたいと思う。

　富山の良さなど情報発信は重要な言葉だと思うが、答申案では情報発信という単語は「6　郷土愛」にわずかに記載されるのみである。教育、郷土愛、観光交流のいずれに位置付けるかを整理し、市民が富山の良さを自覚し発信できるようにする必要がある。子どもに富山の良さを伝える郷土教育の充実も重要であり、シビックプライドや情報発信につながると考える。

　また、教育の部活動が担ってきた教育的機能について、地域展開へなかなか協力を得ることが難しい現状もあると認識している。地域展開における協力体制については記載を付け加えていただいてもよいのではないか。

事務局　　郷土教育や情報発信について、記載を充実できるか検討する。

委員　　市や地域の活動に参加する方々が高齢化しているため、計画を公表する際は、市民が自らもまちづくりに参加する必要があると感じられる発信が重要である。行政や補助金に任せるのではなく、市民が地域活動に参画する気運をつくることが地域づくりにつながり、計画全体のテーマにも関係すると考える。

　審議会等への参加者が固定化、高齢化している。今後は若者にも参加してもらえるよう、開催時間や参加方法を工夫する必要がある。

　また、長文の計画をすべて読まなくても、短い表現から趣旨が伝わる発信も重要である。

委員　　県の計画に多文化共生の推進を掲げたことに対し、感情的な批判が寄せられている。労働力人口が減少する中、外国人を受け入れるのであれば、互いを理解し共生することは必要と考える。一部の強い意見により議論があおられている面もあると感じる。

委員　　行政には公平性・平等性が求められる一方、他者に危害を及ぼす意見には適切に対応する必要がある。審議会でも色々な方から意見が出てくると思うが、必要な内容を取捨選択した上で計画を公表していければと思う。

委員　　今回の案は多様な内容が盛り込まれ、よく整理されている。一方、従来の枠組みや制度の範囲内にとどまり、抜本的な課題解決につながっていない面

もある。既存の枠組みを見直し、新たな発想で取り組む必要があり、そのためにも若者を部会等に加え、新しい考えを取り入れることが重要である。

委員　　部会では計画に関する意見が多く雑談する時間はなかったが、部会終了後には、この立派な計画を関心の薄い層へどのように伝えるかが話題となった。「推進に当たって留意されたい」「実現を期待する」と記すだけでなく、計画の内容を市民全体へ届けるための取組も加えてはどうか。

委員　　自治振興会の重要な役割は、多様な意見を集約し、地域の合意形成を図ることであるが、その中で若者の存在や意見は不足していると感じている。大学生や高校生など若者の意見をどのように取り込むかが重要であり、それが地域コミュニティの形成にもつながる。高齢者、壮年層、若者の考えを結び付け、地域力を高めることに努めたい。

委員　　若者の意見を施策へ反映することは非常に重要な視点だと感じている。こうした委員会の委員になることも重要だと思うが、こうした会議体以外でもどのように若者の意見を吸い上げるかが重要であると思う。都市マスタープランは3年間かけて策定したが、その3年間の中で若者の意見も重要となり、若者を対象にしたワークショップを開催した。富山市も市域が広いため、地域ごとに県内大学生を対象にしたワークショップを開催し、その成果を地域別構想へ反映した。大学生は県外から来ている学生も多く、これ自体は悪いことではないが、卒業したら県外に戻る学生も多いため、地元との関係が深い高校生にもアンケートを行い、意見を反映した。

今回の総合計画は概ね完成しているが、今後の見直しや他の計画策定において、高校生を含む若者が参加し、意見を述べる機会を設けていただきたい。若者にとっても、大人の意見を聞きながら地域について考える学びの機会となる。

委員　　高齢の方々も含めて話す機会や、地元のことを教わる機会がある地域もあるが、そうした機会が少ない地域もあると思う。そうした地域は学校教育も関連して対策する必要があると思う。富山の各地域には祭り、獅子舞、地域の運動会等があり、こうした機会は世代を超えて人が集まり、若者が地域について学ぶ機会となる。こうした機会は地域への意識や人間形成において重要であり、地域のつながりを育む取組として大切にする必要がある。

事務局　　今回の答申案は、委員からいただいた意見を可能な限り盛り込み、誰もが自分の 10 年後を描ける計画とすることを目指して作成した。幅広い内容で総花的にはなったが、実現に向けて各部局が事業にメリハリを付けて取り組みたい。

若者の参画は実際に参加していただけていないというのが現状である。行政主体ではなかなか進められていないが、一部地域では高校生を対象とした

ワークショップも実施されている。今後もこうした活動を支援し、若者の意見を市政へ取り込んでいきたい。引き続き市政運営への協力をお願いしたい。

委員　　高校生や大学生に加え、20 代後半の女性など、富山を離れることを検討している層の意見も聴取してはどうか。転出を考える背景や生活上の課題を把握し、施策に反映する必要があると考える。

委員　　若い世代が富山へ戻ることをためらう背景には、子育て中でも自分の時間を確保しにくい環境や、男性の育児参加等の課題がある可能性がある。性別を問わず、家族に過度な負担をかけずに自分の時間を持てる環境を整え、それが標準的な在り方であると発信することも重要ではないか。

（以上）